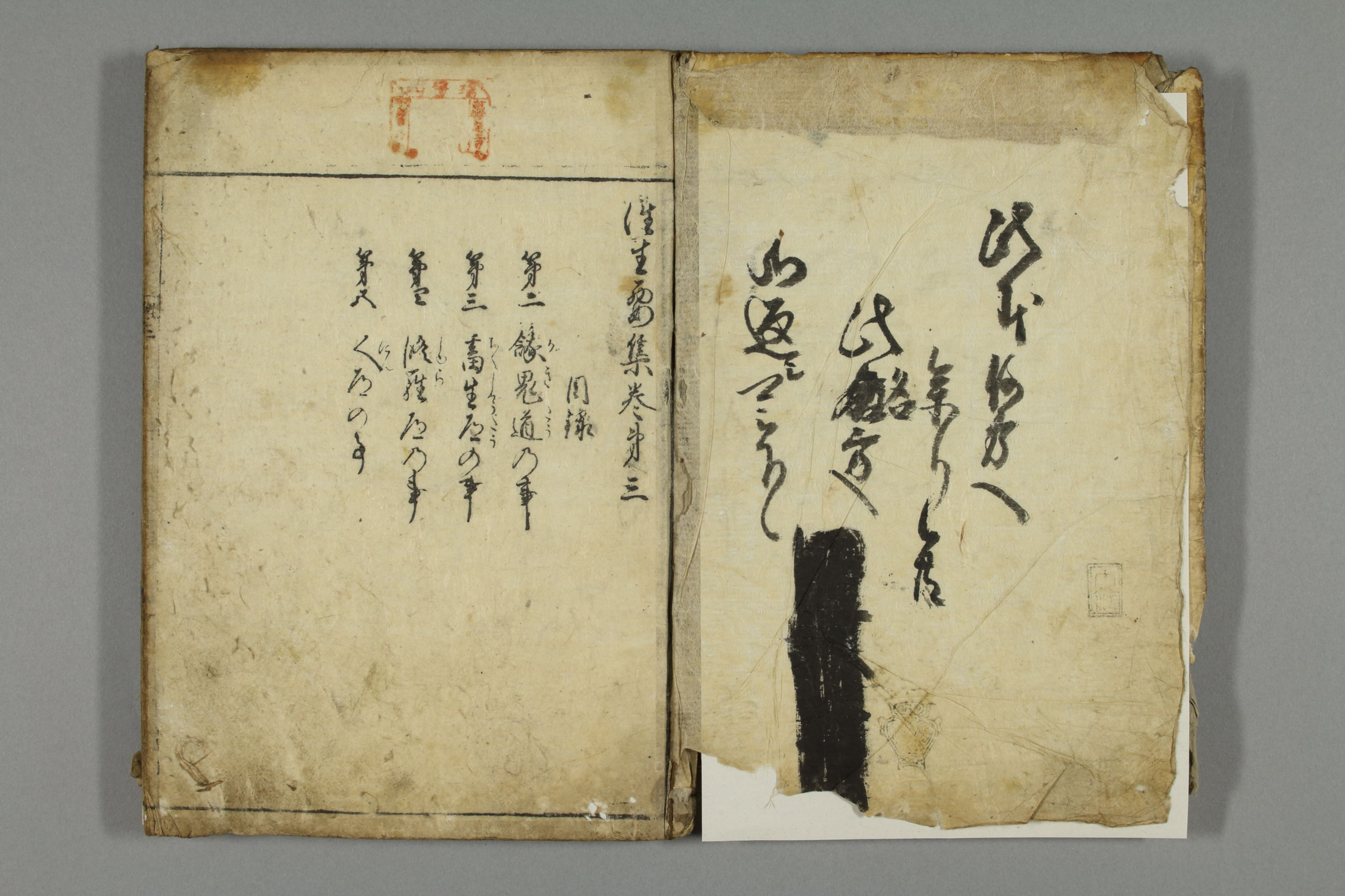


住吉物語集巻第三

目録

第一　鏡影道の事
第二　高砂の事
第三　隠雅の事
第四　くらの事

第二　鍼鬼乃の事

○そもそもこれをいふに人倫和合の中に二ツの地の下に百虫自ようあり陶魔鬼神なり二ツは人天乃おひざにそのさはりをなすなり

と鍼鬼あるひは分れを一尺あるひは人の指乃ごとくあるひは蜈蚣絡繞あるひは蛇乃ごとくあるひは鍼鬼あり獲分となつてその分大きに長さ全すべからず二信地ふかきなく目もなくして鍼おりを獲乃ごとく鍼みちくてその分を焼こびて二ツひとつ毒をひさぐりてこれを焼こ煙しろうのごとくひとつ毒なりて人あるひは修験者食吐とゑづく分鹿大ふりとくけまの自なりけるよひとつ

もどへてしきおさんとりとめて食らうめどうはす
なしまうる也ものもはひとりあるひいまはけて日のこの夫食と
ちうひて書るよあうどあるひとを如房乃こづうしてう
つとうひうくまにあうるめいひうひとうとうあうえあう
ひい鍋尾を食氣となづくせのくれやまふにうそれ
乃魚林の中あてまうりとまうるうにやうくい食物
れ書をとうく命とはぐありうこれいひくまるなどれま
へにあるてまれひうりう夫食をうこーあいひうひとう
ちうる也人あうひを鍋尾あう食はとうねづありくも
うきうふとをとうーつ也ゆうて食をとうむまとも夫ふ
和えひ也ーもたゆよりうう泡逃雑尾汲はあまいき
四力をえて命をはぐまこハ名利をひさかりて為澤
汲はーうるめいひくひとうくるなりえあうひ鍋尾あり

食れとおつうえみようつえく身をこゞーあいてさいぎそれ
りとしまども霧ぐらりもりとめえび髪いあくくしてて
りそてを霧へしめふんりとこ海なー門の盗ふこりを孫
さ為人にのをりうう見れるづりの場らくるあいあをさ
きはやくおさめとりてあ屋うくのんどをうの用義とつぐ
あるひい人のれを海ひくくあ引ろ父母よ女ひくあわり
おぐりりをえくく気をつぐもーぐうれをこれぐあをま
りりをりくの器た狩をもれてさんくよおこれをひて
酒をうるーにれをくくへあるひいみをとひりをもづめよさ
海をつりめうりめいしひとくく海なりみあるひい孫
恩あり帰らしくえはくーー世の人は死ーろ父母のあふ
まりりをまふを代書すりをとをえて喰その
りりいしくくくくー四事あるーーうりなりうれを人の苦労た

てがのねをえうりをたぐらーまどりてをりの用ひりるも
れいい孫ひをうりる也又孫鬼あり海のりりよ生れうら
海ーき本法のあなーあるりありそれふくありてどあり
くしてあるの日を人月のあるにたくぐりれよぐいをと
きりあり胡蝶をもりきりありき食をけぐ海のりか
りりふ海くいへどりの孫鬼の用ありりもりくりれ
かりくりんりあるりあ人病よはれふれ
よをのりりねをおざいりりをりて優をすりりあるへりりあ
いいーひをりりあるりる也又あるひい孫鬼ありりりりり食把
をりりめえざれを書にりりりんりひ墓あにりりて焼こ
ぶーりるりるりりをりりりりかりりりりりりりりりあるりあり
りれをりりー鬼の書りりて特人りりの食把をおりへりり
てりりりのいりりりひをりりりる也あるひい孫鬼ありりる本

の中に生をうをて大木のふ抑はあ〜高き木お
織出のらく大若惱とうこれをひて〜嫁〜さ嘉〜
れ木をとり入ちこ中の木をとりあらあひ拔ひとうぶ
ゆりみぐさをかりらの繁これそでうてあまの〜分を
とひそのうを海のらく〜〜分をとりこれあるひい裏
て火煽とおくこを分とめぐりて燒こひへるひい豚鬼
夜昼ゑをを入人ぐうあり者とひ〜〜くしゑとり〜ぬふ
くあ主ぐ花はひとり入豚鬼をを一切の食どり〜
ふまあ〜ざしをあ〜こつ〜かう〜〜と屋ぶり惱をとりて
ら〜ふまをあるひいはしり火をあ〜鍋とりふひのうんぐ
火よ人を食とひう鍋鬼をあるひいうみ血りすをき
糞ち乃洗ひ〜るれ洗りをら〜ふうをあり入おれさ
りあるたり食をうをえうう豚鬼をきそれとう

みをうふよう人うく手はひよふをうれをその分をとう
きてあれよ力かくよ鍋くをでも黒うをの風をし
あとれつぐたを洗をあ主とのをを乃ををうをひう
ひをふ拔びくのまとをれを大力乃鬼ろ〜の枝と
れてうあるひをひふあ〜ふまうれ火煽とをりく分を
やをあるひををおうり鍋をつをあうはうあるひい間の
をうふをりて食をうをを乃をを豚鬼ありをれをい
うふをうよ腹をを大乃ぐくるれをは汁のをすのを
をくなれを鬼ををひのををを和よあ人ををこれををうん
をををををうあ門乃をうかるれをを食ををを
ゆうすあをぐう鍋鬼あるをまくお乃食ふあをそれ
ををうぬをひをくく変ぐく猫火ををうをうを分を
をををををうをいはうを人ををくをぐをををををのをひ

ふもとにて縁起のものをとなへまゐらせ歌の一月とり
て一日一枚ずつ書て五百枚なら正法念処経よりいでて懺
貪嫉妬乃の縁起遠よりあつめて抜書て懺貪といふ
いわれのとい嘉ちらばどもわれ人を恋しわれとりとこ
ろなく人の和とばむさぶりてあまろんなきといふ
さらばとふ仏乃とへ歌なんてとのべてらか
歌をはをこのもれとえてもつふこちわるこもまか
まつふいとんやいこうあまてば疏食とこひれとのこ
ひらとまけて枕とこたのこ
しこふこ人とふくこ稼こむ事なこの中にありとつへつ嫉妬
それんひろくもぐあにくこ人の歌とあどころあやまり
とあくこあるば嫉妬乃思ひなくこて考ん人やを見
第三　畜生道の事

○それちくしやうぐのいこ須弥二川あり根ねの大海ふ
すこをふくこ八大ふ海ふ
徒乃れひあちすべあるこ
乃こひこりよい歌の多ひ
いろくこちくこ苦ふと
なこるのふのまれんきこ
ぐひよ海宮乃こみ和畳ちらやこひまあ
海○よれこるんあちいこ
ひいすぐこるあふあこ
猫師よ命とこくこなちこ
いあるひころぐ○ようちうぐ
こくもあくひい鼻とうぐち
もあるひいちをにてこ

○

きひとりどもひとりてそうそう事ひまもなくてあとやひ
ひ鼠と称ぶ人ども出よ海を出びと蛙蛟嵐狼の毒びひ
ハ雷のうちふ生まれて雷ならんの死蜻蛉風蚤のたぐひ
そ人の身より生じて人とあらそれよりあらの蛇のうぐひ
ハ鼠屋こ蟹のうちそうしみとうもそやひまなしあるひは又
蟒地をそうる身大きれたけもぐ蝉そのん蛭なし
てうぞうのうちまろび脱してあるもくしゆよりあるのち
いされひ嗅さくらふまひまめあるひは亦よりの
みぢんのごとくのものあらひはこの毛と百のはりと
ふかものれもそあるひは一万由旬のごとくあるもあり
くのごとくあるくのちくそうそれは一時のあるひは
百あるひは一初のあるもの百よ万億初を浴くこ云尋ね義
うくなりうれを五病ふ嫌ありてうこうよ入れ嫌

施と受てその報恩と云くのいとなむ紙ひとえ

第四　修羅道の事

○それ修羅とは[illegible]とあらすふこゝろあり[illegible]
[illegible]のいとなむ人間のそこに住とすべく
乃れらこゝろのいとなむ別のあひだ[illegible]山岳の中
よりもいとなむ[illegible]ひあつまりさかそこ大海[illegible]
天と戦ひてこんてくまをしこゝろ[illegible]
乃義とこゝろ[illegible]毎日[illegible]
の[illegible]ひあさ[illegible]
くたびよりこゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]

しこめそふべこゝろ

第五　人道の事

○そもそもけんこゝとあすふ器[illegible]こゝろ乃れあり
まひこゝふ親[illegible]ふ清乃相こゝろ[illegible]
こゝろ[illegible]おなじ[illegible]
[illegible]人の[illegible]ふ三百六十[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うの方○とさくへうめのほ○さやぐひ
の方○とさくへたくぐひの方○とさくへそ
のうに鬱鞠あり又うの方○いうこれ方○とさくへめ
このほ○ハひらの方○ほうそう方○とさくへひらのほ○とさくへそう方
ハたおころの方○とさくへうおこ
ろの方ほねのゆびの方ほねとさくへありくのごく指
くそこいしてうさらあかせてうこ百六十の方○あの
きらてくのうちうすあくへびうち鹿ぶ毛こうち
毒の方こしもくの毒こすうて宮の方かうこ脇入百
分の方ひとあまくめうちうこうちあとくへ仏
像の方ごくへ脇あひうけくへ百の鞠まくひ七百九細
脇あうこまくひ十ムの方脇うこうめうてあひつく縁
うち二の方ちくひうちの方縄あうとさこひうまうち

まことにひとしかるへし十六の腸胃ハ生發の繋とさだまる天
人の氣脉ハ往し營衛のごとし百七の関ハあさからぬ横
ふかけれど黒のごとし八方のものの名ハみなれたる事を
もろておのづから又根七竅に淨の物をうけをり
七重のほどとをてはここの味ともろ中なる花聖
あらそふむさぼりの毒ごころなくのもとなる邪ハ
一切ふたつをもがらく自性ぞ一人まじなり非う
ちてまおとろく寵愛し憍慢せん又いろく緣中に入
繋をさく荼ふくおのれがひなをひさしあひてわふむしの人
つまびらかのごとし荼のごとし孔竅實味よりして肉外
捐無ぞうかにあく九十重あり肺の繋あらてわりを
名白し肝の繋を黒し心の臟ハ中央にあまし一を
いふめし脾の繋ハ黄なり腎の臟ハ下にありきよ

いろいろ又六腑あり大腸ハ傳道の繋とし又膽の繋
さらもさきひろまりの名あらし膽ハ淸淨の腑とし
又肝の腑ならぬ名あらし小腸ハ受盛の繋とし
又心の繋ならぬもさすなりひろくその繋あらし胃ハ又
穀の繋とし三焦の糞中にあらその色黄なり膀
胱ハ津液の繋とし又腎の繋ならぬ中ふ一身の原
あらもこころろく語らし三焦ハ中瀆の繋とし
らくなるもん微搏よまるしく大腸小腸あり白く
又ともじへて十八めぐらめぐりて毒蛇のまとへまるが
ごとし又項より咽よりて髓より膚よりて八万
の虫あり空の空の口九十九の虫あり
まとり一ツよあるを二ツの戸ま又九万の海なる虫あり
うのもの気をまうもちいさし寞穢理よいなくはじめて

胎内を出るまで七月を経て八万の戸の虫うまれ出で
て蝋瘻よ食ふ二戸の虫あり識髪と名く髪の根
をくらふ髪を食ふ二戸の虫あり湛眼と名
づけまなこにすみてつねにまなこをくらふ又四戸の虫は虫脳と
名く脳をくらふ又瘡蠱といふ虫耳にありて耳を
くらふ又蔵口といふ虫鼻にありて鼻を食ふ二戸の虫
をば遮掛となづけて唇にありて唇をくらふ
又一戸の虫を針口となづけて舌にありて舌をくらふ又歯に
虫あり其の首といふ又百八右のやからとなる虫あり
の虫は生臓をくらふ二戸の虫は擬膝をくらふ又四戸
のむしは膀胱にすみて尿をくらふ又四戸の虫大腸に
よみて黄裏をくらふ又黒頭といふ虫脚にすみてあし
をくらふかくのごとく八万の戸虫この身によりてまちて

よりひとくらふ此身を壊しなやませいたいなるひあ
らしめまたろくの病をわずらはす此温番をよく除きやうと
きかし浄ふ云人まれにして病をわずらはしくのむ
しからるれどくるしむことおほしひとりくらふ胎子のゆへなり
かくの苦痛をうくる事にれなるく男女春情をたのしみ
おごりつきあふむまれるくの虫をあひ食ひつくりて二
けり此のこの七月のあひだ食ひあはせ十月まで一つの
けり命つきて一戸の虫なくともまたたく脂の流味を
食せずれども育を遂るもいかにも浄とするたる食を
畫臊の大小のまに臭きつしく此身も又不浄から現かす
きらびやかにてもただ不浄からまひ大海の水の
とりてまで洗ふとも此されさまはなしかんにはろうきさ
まさにひとかどのに人ひとの身をはなれての不浄とつひ

移し亡骸に畫様と變ゆるまし九相の偈に
いへる身見くふ淨なりと知りまして若いと更に
愛情を起の執着とのミなんを内のふ淨を観せしとい
ふ況まさ命おはりて後塚のあひさまなる一日二日乃
むち日経わまれば其身膖脹して臭くまに爛壊して
臭くさきまて膿血なかれ出鷲鷹鵄烏狐狼
いろくの鳥るゐ獣のとさ乱食ふあらけさ捨ゆしひて
後は彼ほよ雨さしもそ無量のひとよるる臭さ遠へよむじへ
もいり入されどえらふみ死すゝ精らも相ぬもりて
身と露ひすぎさらむ白骨となりぬまでもよひて
のちのもられ手足髑髏なくちりへて風よ吹
身ふさし苔そとさ地はひて白骨もさうり逐ふ
積てけてらふ肉りれ去と白天が語らいへく

爲楊が執着いまだ消やらず白骨となりて後さへ鄰家
に捨ぬまさにたふべし此身ハ始終不淨なりと思ひすつべし
の男女ふかく又ハ心じしゅべし留ある人ハ小恩愛
をふかさんや彼よ心親よ云いまだ此桐と見ざれども愛
樂をかつて徒しもしられとされど欲心をとへて羅ろるか
ま生ふまみぐれたる人ハ妻を見ざる己れをなかとさう
飯をとらふらちまらん臭氣をすつましすれどら臙
脂しきいろく粧ひれとおしなべば高く眉翠眼皓
歯丹唇も一しきれ尿粉とその上に粧ひつるがごとし又
たもて向屍よ假よ偕敎を着かぶとし衣服にも
見ざれいかんや身たちらうぢを飲抱婬楽せんやかくのごと
くなるねる色婬欲の病の大黄湯なるを
○二河小若といふ事この身はしめるく其ゆよりこれをさつ

十三
十二

称ふ苦悩といふ也蓋僕經に説かくいましめて男子
ありしハ女子ふしめを生れおつるときあるひハ手ふて指を
あるひハ衣をまつくりてあるひハ冬寒い日暑氣冬ハ夏を
風身にふれて大苦悩をうくる事生ろの牛のごとし
ときに癲癇をおこし長大て後又苦悩おもし
因に經に説われ此身をうけて二種の苦あり眼耳鼻
舌咽喉牙歯胸腹手足にいろいろの病を生ずる
かくのごとく四百四病その身を責られと内苦と名づく
又あるひハ牢獄に入て種々の責をうけあるひハ
又耳鼻をそがれ手足をきられて種々の悪鬼悪
称々の兎をうけてなやましめ又蚊虻蜂蝶蟻
いろいろの毒のむしにさされ家に蠢て食へんとて飢渇こ
とあらりなり西風におかされ霜雪なごれまことにより
種々の苦悩身にせまる擲し此外陰の身ハ一つの戯
れ気虚居めぐらし躰をし苦よおもふ事あり又ど
うまれにめぐりくもやすかられと思ひ出て外苦を
しらぬ此外の種々の苦のさうまのまへふ見へず
説ことをまけりべし
○さりふ無常とふ涅槃經にいはく人の命ハ
一ろくをまてゆうぐるものすこしやくなりたる
あるハそれとてもあすまでされもかさき也出曜經
にいはく日をかぞへますぎの命又ぶらび獄く
かならず泡のひけめのたまらぬよもうむ奥うらもあと
ちの水にうかべ又みなかの楽しまんや摩耶經にいはく
ともし梅陀羅のうしを並ら屠所にいてる時一歩つつ
死地にちかづく人の命も又かくのごとし

たとひあり命をもとの業をもて子孫あまさうづきを
月はこのゝ乃表れ絵あるものゝ屋乃ゝ表れとてさて春
のよむもとあつれあやうら柏の木に他のゝ人ふくしや
まれまゝいうるもとうもとをもうなひふ
てもも又孫ぬれうちひとうふうとけあまでおられ
されぬことをなげきうあつてちさ表とうとあまよ
つもむ乃ぬぐもとうきくもちくその男おとろ絵よを
きとまねんぐ嫁となりうれで人まゝさびさ人をを
たくひ蔵きのひとひと蔵ゝ屋とうかし
蔵屋ゆしくあさうひて乃面よ竈となゝ面ふて
鳥ふ冥迷ゝう美人乃湘の春ちふうてまれ
ひうゆうくうう又蔵乃ゝ華の祇湘くしひうふ
ゝして秋乃ゝうきう濃くまうまいあうまゝ。うふ対

うう人ゝううきの乃髪ゝなうもあうも人絵乃濁よ
ゝく一切ゝうくのぜうれ生びふりのゝふ死よ母と
春表ゝうなきゝ体ゝふおゝうあうきゝれうゝいふ
ものいうゝうず世ゝ人ゝ表ものゝさゝめてまゝふきこう
つまゝうゝ形も久しくうて神ゝずうゝうゝさ色ゝ神よ
おうきれ命きゝ死のゝしゝあゝふ春ゝ清くゝして清ひふる
ものゝ句ゝ又飛栗意林清よいうくあゝ法よ清ひよ
嬉を失きうんゝふて久ゝく物ゝを日おうく縁史よい
つを用うゝてすてゝいゝく絵ゝうう業ゝまゝひゝんよく
も安常ゝいゝく続ひうて又ひ人よまゝうゝうゝ飛お
ゝのゝくゝ伝ゝんよ安と号と礼をゝ唯ゝうて
乃ん史ゝのゝ安きゝとれゝうゝにもあゝず仙人ゝゝうゝう
風よゝのゝ歌ゝうよ表ゝ起ゝゝ月安ゝゆゝくゝと況又仙境

そ田ぶとうなんは花さくこと如ほけく経
のうきうくくくくの世界繁盛しえる地うく
すくぶのあとありてえあつらもゝ当はまりと
七度見くうる仙人も浮よ無事とのれえびをこのゞ
まうこれ入岩屋よくれ死とうをざられのお
しの仙境よりあそれ乃通を移ゞつひでさゞめく
冥金くくくくくよのたるうゆゝうあうられられ
くくもえよ移ゞつうねもこゞをゞうくかしこゝと
うこくくあゞめはくれ乃ゝくこれまくうひそめ絶仙
をくけうして常楽乃果をりしひゝ聚まる長寿
乃教器くくのいき人賢人えくらすして働きくく
ゝくくもひかいあやくくりあくれを勢ゞ乃寿れの
泡あゞこふぬれりくぬ乃ぬあくらいうんそ憎紙くつひふ

紙とんやとくおろかにして百の銭ともなるべきを
にせひなく四方にはしる賦斂とつくる
をかたちをあるをといまごんよあさうすかたちにも
ゆきあるをしのうちんたりあるべく法のうを
さ嘉ちり分にさぐどぐ冥途よひとりまもうそく
らさ中ごの腹のそしあらそう術をさつ
ふんとものちりそりみの法の西仇紙奥いまご目ねも
ふうぐに淫うをしわらちふ巻の子んあまわ
ようれをおほく我をくかくさあるといひもく
四流うみの嫁となりあるもいとるあるそれ
さうう事をそや川のうかぐうなるをうく必
く尾いるつまのひちりれをやうなり海山屋
宝帝山中めぐをまちんをう海のかくのぐく就会
ん大ようにおそれつく商
ぜんとまもじぜす郎紙をとくぐくけて出離の
道ちりもむぐくえいをくあをんとの平屋
紙とうるひいけりの眠つてまあるんとを
たちまちひとうをんとを使て必大をれ
ぐくんまと生も病のうを川よあくくれをくふを
死ちまをゆうをにをびを那をまをゆをれぐるあを
るくうを法にちうなれ湯と探り大をもむくく
数六欲じをうち深んいくを海あくほをうく逃
ちうくふ賦雑をく

法華要集巻々第四

目録

第六　天道乃事

第七　六道乃肝相結ぶ

第六　天道の事

○それ天道ふたつあり二には欲界二には色界
ふたつは色天欲界あり色界のなかに四ありてつま
ひらかにのべがたし忉利天を略してこれをなづけ
らんまづ天人のありさまをこれをいはんにつぎの
ごとくなりかれらの命のおりふしなりぬれば
衣裳のかろきもあれをもつて一には光鬘ならまた
に光明をもつて天の羽衣をもつぎてこれをは
服のたくましきあるいは面服たくましくめらめ
きをもつてはなのたとえをもつて樂しまんとをもつて
なつをそるびるをもつてこれあひわまして天女養育
くいとひをさけ捨てぐらをもひとをの名にかけまた

ひ法蓮華ひあらはしなるふしぎをあらはしてひろくこの
よ為にくれ天女をばもつぐ分つひよ者せ一ぶいんぞと
いあさけをく業とすいるつぐ〳〵ちく寿をちらもあ
れまびとをくや教ひ人さくあ一あまとう又我をと
くうんや善見の天流とさうてむう法をえあへし
帝釈の奥座をまみしむ事をうをや須陀洹
のあなるををなくくうんぐ歌天帝釈よいうと
うふのりあん元車蓮の花とを我又なうめやそせ
む雑華蓮の酒義よえう釈とはし稲まし歌天竜
の中ふいあをひ〳〵まるべうず初後樹のりあ白
玉の奥石よ座をる事さ〳〵ふなく須陀洹のあるゆあ
をする男ひあ一田稲の林義をあふして食せん天人
善業をを我のををひうあうをうひ〳〵ひるる

しをあひ行り稲ぐうを慈悲とあを命をすひ
をびあんをぐ一のりぐをあぐ〳〵てみをうのをまり〳〵せん
あるれ山後焦浦よ地〳〵をめあふなくいくあつまふ
ひり〳〵をを拾をあるりる山〳〵れのく
あ一をを地獄をりををあけを〳〵法をく雅ををう
ぬべ〳〵れい正法会雅あをを天ををりをんをりるく
を天善悩をまひぢぐくの元若をを〳〵ふまでひる
しをはを〳〵て十六ぐ二ひりぢぐの若ををわを
又大法の天人生るれを天女春屋をひんをふ
ますを〳〵大法よをを〳〵ふなりあるひを賊法あるを人へ
のんよををぐぐざるめをを天ば天中一をりあ一法あるよ
まあをやめをがりをりを天の欲天あをはるをぐく
くぐんあり天を男の二天をはくのををりけをど

神仙天道のる

[illegible]
想夫まても物鼻の業と
とれ楽しとをさしふ
おろかすやあく祈ぐ
第七　想して六道の欲おと法
○はしく想して欲相と祝
めり鏡芸べしず口心合
ろあ[illegible]に貪欲を合の
ひやく又欲よ為しくつ
あるぬと楽と思ふの癡
なんういとうんやいう
湯をるべしあまり智あ
むやうれて正法を強く智者ハは

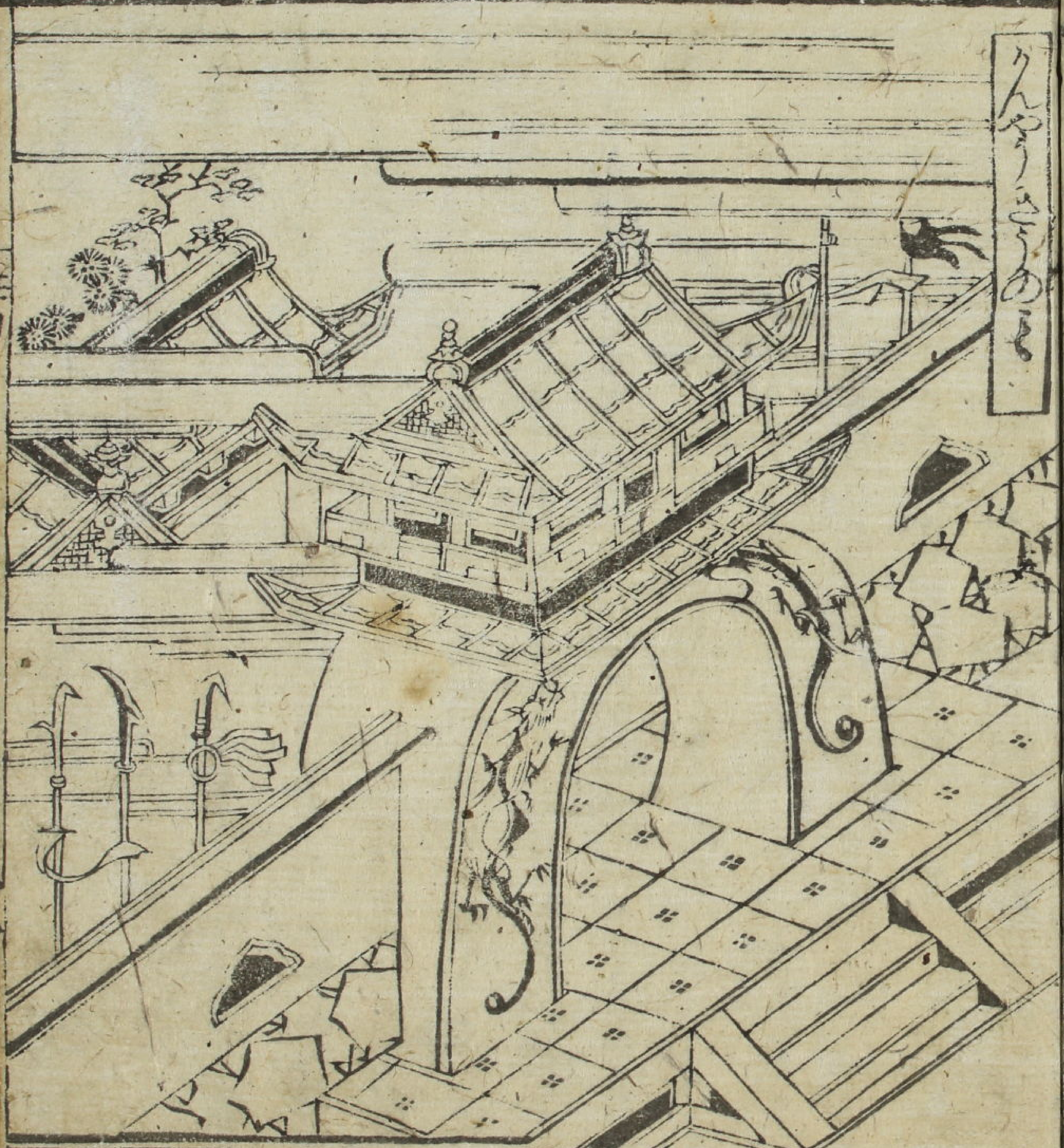
[illegible]
しまを夫ひ
獄中の囚
のあくらと
と思ふ仕
て財物
ひくつ
子
宝
面
[illegible]
獄中の囚人をつよみ欲ふて
[illegible]
[illegible]世界
[illegible]
酒一盃

人よりてづからふ毒物とおぼしきものを食せしめ
給ひ[illegible]人命をたすけ給ひ[illegible]
ぬ[illegible]人命をたすけ給ひ[illegible]
とうかがひ[illegible]ひ法根と奥しても法義よあひが
うたとひ仏義のあらんをおうかがうまれた
人種よいまく人身に生をうるのハ[illegible]
三途よれ[illegible]るものそ十方乃ちのとし法華経ハ
く世尊金剛[illegible]
[illegible]人身とうまれたるハ[illegible]
うけわひがたきれ義よあひねをも苦海とうまて
信ちよ雖生をうんすたと生にありさあるよ釈ふ
うまい衆生をとうてうて法華経よんとそあ一生ハ
都[illegible]ふつあふ仏日ハ[illegible]

ひしゝ爰泉つそこに へあじ多百論絵形の洞硫
極火の中よ高くく天を呼つ地とくくくくいかくと
何乃蓋あくんや移りつくそくくつりも若くあ歌離の
んとおくしすくやんお離つ今くくくくべ爰乃宮
入てひあくくゆくあくあくと　あくくいくくいの長の
相とくつく歌離のくんとおくすべくくや　答て云と
ひくく歌ひんとおくくくおの西流のどくく広道乃園泉
ふ浮表多あくあるひ広久絶相美蓋乃獨陸加美
すくあすふ偈よくくくはは不浮れ孔くくあべとてはは
海乃くくまくやひまあくくくくすくは寒ひくく
しくて浮浮よ洲くくれし綿律獨陸とくくそくく
かべくくくくの多あくくいつくくたくくくすくとくくて
文歌とすくあとくて病あくくあくくくさくよくくくけく

はぐあへあてろうけまとも後の若とも也電欲れ和
もものごとくそなへたるのめども後よへうまひ多し
另れ実れハ落ふ浄ものらとそうの ハうまと云我と
なうんとうなりふ釈と修するのハ竹釜の中乃
せうとなりうとうを毎とうしも毎ものなりとも飛ひ実
智なうと人をれ〳〵貪欲のごとくとう説いやし兆
て寸見とくあるとうんとうごと飛者と後をるめと勝
ととなげく利衰乃ハ法をまぬるものあもし
貪欲と陰乃せばまましてぐひなき法楊乃人なり
あるひとも乃法つ塵屋つあひよ父母者を乃ひ
春屋のとうとうとうひとうとうけてひろ〳〵言地
はれとおす者あしあるひおとれあふすつしの
ものとおうひとも者人器へ飛者乃とうそしの悪と

法くつまとも見阿よハ祇ハさしのまし加火とうせ
そうあひ知ごくなる者いあるさしども後よ屋わと
しめうれてはうはちごうよ人くり後くの者とうく受
後んとはれ祇と多学と智恵と想魂と心設色とのセ
ひれはと重祇と名つをてなしびとあき言実乃た
うなりとの者乃重云なりりつる世るりりく
れ祇家とはけるかふまうとうしうとうしだまづしといい
へも冨くなつでたくうとあるとも歌多うは光と者を
あづく紙実おかうんでりうくりうくとまうすことたうで
祇のかしら祇ハうハ破毒とまうすごくく美味いうく
ゆうどーと祇で智恵のれとまけてそうさもむ
でうの男をたもうんうめよ食とうちゆういへうも屋味を
ひさがりは後とゆうひてゆと客とう者なれのゆよ



ふとゆしなふて大とうしあまり事あられしと孟子もいはれし
めされ文麻眼なりしに兄をもちゐへと隠し密とよふ
せくみれもり何をか曲をしきぎり惨懐と長せんや
想して内ふのこくとらんをよしきさるを仰拙とのわろうか
ろくしてへの錦繍ともゝしやまずとの蔽衣とするが
ふすあしされて縕袍をもたにあてろぎしておくいおく
食とくべあたるのきいまざよもにくりれたしざとい
へのうんやうしさうのミ百餘里にふてゐんして足
間と瑤離そくうしを坐んどまえを膝とつう流
を紫乃いほられあゆしさもその招と見ざりとさき
清寡ひくしき道場をそやひろく徐ゆきうかんるて
もし麁もさしやとそくあるしでよめりのむるぞ
が山めくらするぞくらしをしあしうあふ事ありでも

心の欲をあすて生死輪廻をとゝまれえねゝのありさ
まをおそれ〻あるべきの欲深をおもはゝくいとゝ
と生ばはらわらけまして世と涅槃の道をもとめ
まゝの分を調和し安隠なるこの娑婆を修
で一夜をゝくれば人間あり三界をわたる光陰
休息し物事修行の夜の心河を生死と観じたらめ
ゝく夜をとりもひでしかるべくくもろ〻あれたゝへおれ
塩と酒のよをこれをあれを調味におすまなるべ
かゝごゝく微細のあるほりあくれ者よあひの色を消
滅して義懷するまゝくこゝの〻〻梵天の雖欲の
ゝのゝをとゝくゝとゝどもゝの〻〻せるの〻燃脂の苦にお
ちぬゝゝゝは君ゝく方ゝ光明とゝゝゝへゝもの
ゝふゝの悪雲地獄のなゝゝふへゝゝゝゝ滝ゝゝく

苦活ちゝく八熱剥身刀ゝゝゝゝゝ八川
八地獄をゝゝゝゝゝ落これ命生死
業のひゝひなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

屎尿糞穢のわろくの不浄をきらへ百千万劫にても是
をとえて飲くすいるし　たゞひとたびまでかぎりの合掌をと
りちに出てらうんともされど縁覚はひようすめらべ
ひとく菩う世に清涼の秋の月さも瑜伽とうむへ濕和
乃至の日のも精室岩おり宝珠のりとしれなむしきを
だし遊るく乃菓盡清浄のあらまふにてまたたち
まらふ相そりて龍象の縁よりそておまいれさふ命多
ぐく一万五千菓と徑てかろうそぞくとらけて三八
らくもすと海なく一川と思ひ事なし増是縁覚の果
執相悩のもやさ川死生と深つ思念浮志乃ゑいさの
ひよりいえて煩悩をかきこくしくるつごくなるよかく
然蔵労とかゝれせんと思ひて真実解脱の道を流し
てころくれ世あるの假名の法をそるを清浄不縛の私

をもべしり厭離のおもひをなせば天女菩薩の侍女
のこふ色をとらへてもゆるしもおのれの法性
いまぼろしのごとく化生とし三界のうちのたちまち一切をた
のしむまで身生住する般若して勢力自在なるも世
間いへるぬまでなきの文おもひつれんたゞ家あるを
他はしりとへでもさて何ふにてしなさぬかごとし此
身ハ塵劫のうちにさも世々のごとし錯うら織うちさ
しくらの法くへらしず毒蛇の篋のごとくいづものへ
楽せんこのほへよ諸仏のかうこの身とのしまふとこの
偈の中につぶされ無常苦空無我をとのべ此二つの義
ぞくとの法をさとるまで聖業比丘の誦ちの偈
よく生死のるごとくるすへきうしの貪欲のくるかに
ふきりあらはひと噴のへならぬことをゆしすて臨まうり

しかるに六十の年老とうく多は臭くしまるの花
たちつのあるもちふ鄙なるの鼠のひとつの蠱とこのひとつこ
ら出ちてして方とあひひとりもふ色よりしあるす
あ知とらびめてらぐらふ分とらしさいすあらこ
色みうくつかなら勢着ちみぐらふ分せさ色いス
欲とあるちあ滅を邪会ゝうんちあと生ゝ会
者らぼんなとと生び正会にしてとうくあられた体
乃外概をまさ蠱ぬ已上るこの泳猶縁法仏の滅ぬ
よ正法めに中ゝ時よ法度ア利業薩この偈とりあ
えて仏法とのべひろめ五月乃京生を利益ちも
し捨ふと稱つて重門経よりふらし一切を乃法
妙華ふつ泡新山義京山富邪見ス大経の偈
よ云法仏五寺乃生滅法生滅ゝ已寂滅ぬ楽已上

祇園なる無常堂の四の角に瑠璃の鐘ありその音
の中に又この偈を説く病僧鐘の音を聞て清涼の
たのしみを得る事三禅定に入がごとくにして浄土に生
ずいせんや又雪山の大士全身をすてゝ此偈をえさ
せ給ふ諸菩薩偈のぶんをとくに更して忽にすゝむる也鏡
ばこゝろ歓喜して貪瞋癡等の惑ひの悪業をはな
れる事獅子の人を逐てふしきにすべし外道のむや
くの苦ありとありてあるかなの物の理を道しとを
べからず　此で云不浄苦空常ハその旨をさとり
やすし諸法は因あつまりあらわれて假なるを何ぞ定
と説なや　苦で云厭離の縁に説ども無分別化のごとし
どうかの人は義の誌小判して空の義を観ぜし
為識根よりさとし婆羅痆彰虚の施鹿林より二三里

北に國池ありむかし二人の隠士あり池のほとりに庵
をむすびてくらしけるに此隠士ひとつの術をなし砂
礫をもつて瓦礫を寳となしてたちまちに人を富貴
にならしめ又ちからをもつて人にあらず但し風雲にのり仙かける
の術を学ぶ事いまだかなはずまさしく思ひさだめて一人とらんで仙
術をもとめしにその仙方はいかさま一人の烈士を命じて呪
刀を持壇のすみに立てかいきざしてせひ辛えんいたしては
かならずいれつるをたおれに又仙術を得る也と八壇
のまん中にすゑて自身にも力をそへて持つて神咒をとなへし
て見ふる事あつて年をかさねけれはやかてふしぎをあらはして
然その僧とりて池より仙方にはかせて二人の烈士
をりくめぐりてたぞさまひをあつくしてひそかに
めぐみをおこなふあいだかくて一ケ年をすぎせざりし

[illegible]

[illegible]

害せられし中有の方とうけ厩どもくらべくこのまへと
しげきとくならわうし痛をしく疑ひつゝきて生き
せしぞ深くも想ひみしくゝ厚優をとりうせんと努ひ
終に面天窓れ大悲に情の家に生じさら臓
け胎内とうまふ修しの苦患をうけしゝ苦悪とも
すれどしておのとおさむ家督とうけ之恨こめど
つ親とそふしり喪をとげしめ子とまふろまでの
いそん宗族あ威皆られとあやしむ手にわまゝて
我の妻のいそく栄華のりふでしもしのいそどんで深
子とさうしおろそへし難苦をいでた何を引うけう
その附まよ年中に思ひ乞ろハすでに生じく世と名て
しらしつしをいてたえきはくしも持そめてたこの苦を
一人ならしものひろくくまとしめこ縁まるべくといひて

後又我をあげられし修行の証坐して悪魔の分
やせをのしおがあやまりとし後悔をも利益ハ悉く威し
てはすと我執せざるとうかしゝ無念也し悟りて元すぎ
差の深くのもし法性も又統あいつまこ寂のうまさ
めざらとれハ空ふとあらく宿とすかりがばんよ唯識論に云
いまご苦のことらとえされど常に身の中にまぬかれて
故に佛性 生死も投としのに 四て云り無常一音
空智の観とや 答て云ふ観ハ妙業よかりらず大安ふに
も遠すゞ是 法花経ふいかんしし大菩提をさとらし柔和忍
尊をゆるし法性の空をとなとして見まよく說にとなし
まとと法性の空の観ある大菩提心をさ深くけどていた法
苦苦空の観念を菩薩の悟れとも得とくもやさきれ
ふ大殺暴よの後よ不浄空の観念と又菩薩の法となす

利益ましかくに其の経文をよむで回向すへごとく
礼讃念仏ハいづれなかれ利益のあるや　答て云若善心にてのこる
を週へ他の悪をも大欲すくなくらすしてかの浄教念仏にて
こゝろもさへをしれかに無さこと文へおもらさうえ大荘厳論の誠
を殺生念の衛をいへとこゝにはかへるかうゑひかくて
此はおもこうでをえまび法は世のまれ也さかいらきこ
て布施し持戒し禅定しき修せざれど死のあるに青く念て
ふじめくせるくやぎて苦を脱せんし素直一丸文よ基の
いまた観念しくく大欲乃あるをあぐれむのくほとめて
ぎまりて心となしけるり者ハ念の終りまなびても極楽
むつかるかくよこころをもて一心にして極乱乃念あらずし
心ゆしめのひとり菩提のよ何るされで浄土よいそうずうしずん
乱とそ

往生要集巻四終